

～ 戦後80年 記憶の継承 ～ No.4

沖縄戦の終戦から80年を迎えた今日、戦争体験者の減少、戦後世代の増加と相まって、戦争の歴史的教訓が年々風化し、その悲惨さが忘れ去られようとしています。

西原町は、戦争体験者の方々からの貴重な体験談を紹介し、次世代へ継承していきます。

足をひきずりながらの避難

(西原町史 第三巻 資料編二 西原の戦時記録より)

いとかず
糸数トミ(当時29歳)主婦

夫が召集されて八重山に行つたので、私は子ども2人と両親を連れて首里の墓の中にしばらく避難した。戦争が激しくなつたので、友寄・山川に行き壕に入つてた。6歳になる子どもが壕から出ると言つて、泣くものだから、姑、義妹が子どもをいやがつた。その壕を出ると同時に銃撃され、私はケガをした。自分でケガの手当をしようとする、近くに兵隊がいたので傷口を巻く布をもらい、自分で足を巻いて真栄平を行つた。

そこで実の母親と6歳になる子どもがあつといまに爆弾で殺された。父と一緒にそこから逃げた。

父が防衛隊に水などをあげて助けてやつた。その防衛隊がここは砲撃が激しいから一緒に逃げようと言つたので、一緒に逃げているうちに父と別々になつた。父は真栄平で死亡した。私は足にケガをしてたが、父に助けられた防衛隊員が少し食糧を分けてくれたので助かった。

しかし、逃げるときは足をひきずつてたので非常に苦しかつた。足の傷には蛆が湧いていた。

ギーザバンタで敵軍が「手を上げて出て来い」と言つてゐるのに防衛隊の若い人は手を上げなかつたため、敵軍5、6人に銃殺された。私たちは、その敵軍の言つことを聞いて手を上げ、出て行つたので捕虜となつた。その後、百名、志喜屋を経て棚原に帰つた。

「西原町史」は西原町立図書館でご覧いただけます。

西原町平和事業 令和7年度チョークアート展示会のお知らせ

町内の学生に制作していただいたチョークアート作品の展示会を開催し、多くの方々に広く見ていただくことで、作品に込められた「平和」への想い・願いを共有します。皆様のご来場を心よりお待ちしております。

展示期間 11月25日(火)～12月11日(木) 午前8時30分～午後5時15分

展示場所 西原町町民交流センター 町民ギャラリー

お問い合わせ 企画財政課 地域振興係 TEL:098-945-4533

(令和6年度展示作品)

